

# 転機としての12月8日

—西川光『十二月八日の上海』を中心に—

徐 青

## はじめに

1941年12月1日、日米英開戦前の最後の御前会議が行われた。そこでは、11月5日に確定した『帝国国策遂行要領』<sup>1</sup>に基づき、アメリカと交渉を進めたが効果はなく、帝国は米英荷に開戦という「決定」が下された。

12月2日、陸、海軍統率部は前線部隊に「ニイタカヤマノボレ・1208」（即ち12月8日開戦）と戦闘命令を出した。1941年12月8日朝7時、ラジオ放送から「帝国海軍は本月8日明け方、西太平洋で米英軍と戦闘状態に入った」、と放送し、11時40分には、天皇の宣戦詔書がラジオで放送された。夜、真珠湾攻撃が発表された。ハワイ時間とほぼ同じ時刻に、総司令官寺内寿一大将の率いる11個の師団と2つ飛行隊を主力とする日本南方軍は、「南方」に全面攻撃を始めた。その戦闘目標は、東亜にあるアメリカ、イギリス、オランダの主要根拠地を覆滅、南方の重要地区を占領確保“戦をもって戦を養う”ことにあった。事実上、真珠湾突撃の同日に日本軍は東アジアの西洋の窓口である上海の共同租界を占領した<sup>2</sup>。アメリカ砲艦ウェーキ号は降服、イギリス砲艦ペトレル号は抵抗したため撃沈された。

---

1 帝国国策遂行要領とは、昭和16(1941)年9月6日第3次近衛内閣時に御前会議において決定された国策をいう。この「要領」本体は、<http://www.jacar.go.jp/nichibei/popup/19410903a.html>（国立公文書館アジア歴史資料センターデジタルアーカイブ）参照。

2 日本軍の共同租界進駐は、英米両国との開戦にともなうものであり、フランス租界ははじめから進駐の対象外であった。これは1940年6月にフランスがドイツに降伏し、その後フランス租界公董局が日本側に対して協同的態度をとるようになったことも関係している。上海の欧米国外国人や、むしろ中国人にとっても、フランス租界が日本の直接的な占領下に入らなかったことは、辛うじて国際的「聖域」が残ったことを意味するものであった（高綱2005：37）。もっとも、当時のドイツ占領下のフランス・ヴィシー政権は、基本的に三国同盟下にある日本とは同盟関係にあることになり、日本軍がフランス租界に進駐すること自体奇妙なことであった。仏領インドシナにおいても、フランス軍は日本軍に抵抗ほとんどせず、フランス人居留民は、むしろより徹底した日本軍の警察力の方を信頼したとも言われている。

日本軍はなぜ上海を占領しなかったのか？ 上海が中国第一の大貿易港であり、中国経済の心臓であって、同時に、西洋列強が中国経済を侵略する拠点でもあったからである。上海租界を占領することは“世界を統領”するのと同じことであった。アジアに属した日本は世界を主導する西洋列強にこの時点では勝ったということになる。すると、“12月8日”に関する日本人の上海イメージ研究状況はどのようなものであるのか、これが本稿の問題とするところである。

「孤島占領期日本における上海イメージ」の全体については、既に以下のような諸研究成果が僅かながら存在する。まず、日本上海史研究会創始者で中国近現代史研究者である故古厓忠夫氏の『日中戦争と上海そして私』、そして、現日本上海史研究会理事長高綱博文編集の『戦時上海1937～1945年』である。とはいえ、それは未だ相対的には未開拓状況にあるといえよう。その理由は、いくつか考えるが、日本側においては、占領国による被占領地域の研究が欧米の帝国主義諸国のような具合にはいかない戦後日本の独特の立場の問題を、ある程度鋭く反映した結果であるといえよう。

日本に比して、中国国内では、“孤島占領期の上海”研究成果は比較的多い。その中でも比較的名著なのは、復旦大学歴史系の編訳した『1931～1945日本帝国主義対外侵略資料選編』、上海档案馆編『日本在華中経済略奪資料1937～1945』、そして、上海社会科学院歴史研究所所長熊月之編著の日中戦争期上海歴史の大量の著述である。他にも、同研究所甘慧杰研究員の『論孤島期日本対上海公共租界行政権をめぐる争奪』、『“接收”から“重組”——租界陷落初期日本当局対上海の経済政策行方』など相当の部分は本論文で検討しようとする歴史的事実と関連する極めて参考価値のある研究成果である。

だが、前者は主に孤島期上海の状況分析が主線である。“第二次上海事変（中国側では八・一三事変）”後、租界の中立及びその複雑な状況が研究の重点であり、抗日地下活動や日本対租界警察権の争奪が主な検討内容である。後者は陷落初期の上海状況が主要な分析対象であって、日本の租界占領後の“敵性資産”の接受と日本当局対上海の重組問題の研究が主である。いずれも、“12月8日”の上海イメージ問題への検討には及んではい

ない。それは、未だに、当時の政治的諸勢力の評価を多元的客観的に扱うような研究は難しい国際情勢の中に中国が置かれている状況の反映であるともいえよう。何れにせよ、そこにはさまざまな微妙な問題が胚胎している。

そこで本稿では、日本近代史にとって極めて重要な意義を持つ“12月8日”の上海イメージを検討し、日本占領期の上海はどのような状況であり、当時日本で言われていた“英米化上海批判”、“魔都上海悪名一掃”、“東アジア新世紀”構築などがいかなる嘘であったのか、さまざまな論点を整理していきたい。

では何故、山下武・高崎隆治が監修した『上海叢書』12巻のうち、もともとは1943年に泰光堂から出版された西川光『十二月八日の上海』を本稿の考察対象として選んだのか。理由は以下の三点にある。まず、『上海叢書』に選ばれたものは、そもそもそれなりに予め選別された文献であるということである。つぎに、その叢書を監修した戦争史家高崎隆治が解説で記しているように、“戦後、半世紀以上の時間を経過しながら、上海という名を聞くたびに、いささかの痛みと哀しみと、そしてなつかしさが日本人の心の中をよぎるのはいったいなぜであろうか。おそらくこの叢書は、その問いかけに重要な手がかりを与えてくれるにちがいない”<sup>3</sup>、からである。そして、太平洋戦争開始期から、上海の状況を小説化したものは、『租界進駐』など二、三篇しかなく、ましてやこの西川光『十二月八日の上海』のように、太平洋戦争直後の上海を描き実録した書はこの一冊しかないからに他ならない。その点だけでも、研究に値する歴史的価値があると判断されよう。

---

3 高崎隆治（解説）「日本人と上海——概説風に」山下武・高崎隆治監修『上海叢書』大空社、2002年。

## 1. 真珠湾攻撃後の上海

真珠湾攻撃後、アメリカ人、イギリス人などは続々と上海から離れた。その頃、上海に滞在していた日本人の人数は1939年の51,093人（熊2003：153）から1942年の94,768人（熊2003：2）へと急激に増加しており、他国籍人数の合計を超えていた。1942年以降の増加率は緩くなったが、1942年、1943年の増加率は6%と11%、1944年にはその前年より1.5%減少している（熊2003：179-180）。

また、以下の二つの表から、当時、上海にいる外国人数を把握することができる。

歴史事項	年代	人数
	1860	600 ～
	1865	2,000 ～
	1895	5,000 ～
1899公共租界設立		
	1905	10,000 ～
	1915	20,000 ～
	1925	30,000 ～
	1931	60,000 ～
1937年に盧溝橋事件・第二次上海事変勃発		
	1942	150,931 ～
	1949	30,000 ～

表1：上海にいる外国人人口推移（熊2003：1-2参照・筆者作成）

国籍	年代	人口
無国籍ロシア	1936	14845
アメリカ	1946	9,775
イギリス	1935	9,234
フランス	1946	3,872
オーストリア	1946	3,453
ドイツ	1942	2,538
インド	1935	2,389
ポルトガル	1946	2,281

朝鮮	1946	2,381
ベトナム	1946	2,350
イタリア	1945	1,048
ポーランド	1942	1,042
ギリシャ	1946	627
チェコ	1946	581
スペイン	1946	493
デンマーク	1942	468
スイス	1946	407
ノルヴェー	1942	387
オランダ	1946	201
スウェーデン	1946	198
パラグアイ	1915	104

表2：上海にいる外国人各国人口比較（熊2003：2参照・筆者作成）

真珠湾攻撃後の翌年1月5日になると、共同租界市参事会のリッデル議長ら四名の「敵性」参事会員は解任され、岡崎勝男が議長に任命された。警察機構も改編され、工部局を通しての日本の支配が制度化されていく。他方12月26日には香港が陥落。1942年2月15日シンカポールが陥落。5月上旬日本軍はミャンマー全域を占領した。

菊池寛の「序」によれば、「西川君は文藝春秋社の特派員として、大陸に渡り、主として上海南京を中心にして、中支の報道陣に活躍してゐたが、時恰も記念すべき十二月八日を、上海で迎へることになった」。菊池は日中戦争中に、文化人として、メディア宣伝に大きな役割を果たした人物であった。吉屋信子は『婦人之友』の特派員として、松井翠声は『モダン日本』の特派員として、西川光は『文藝春秋』の特派員として、中国上海に渡った。いうまでもなく、『文藝春秋』は当時総合雑誌として、多くの読者を持っていた。

この序（西川1943：序、下線強調筆者）でさらに菊池は、次のように述べている。

…上海の租界が従来如何に米英的であつたか、僕も親しく見て驚いたのであるが、この租界も十二月八日を期として、ハツキリと新しく東亜本来の姿に還つたわけである。

その意味で十二月八日の上海といふものは、十二月八日の真珠灣、比島、グアム、シンガポール等に劣らぬ意義を持つてゐると思ふ。

此の日に上海に居て、親しく此の日の歴史的變貌の諸相を見たといふことは、西川君にとつて眞に記者冥利といふべきだつたと思ふ。そして、よく足で動き、よく眼で見た結果を忠實に記録したのが本書である。なかなか才筆であるから、最後まで讀者を倦ましめないと思ふ。數多い大陸のルポルターズの中でも異彩があり、興味もあると思つて、茲に序文を書いた次第である。

ここでの、「此の日の歴史的變貌」というのは、従来上海の租界は米英的であつたが、この日を期して新たに「東亞本来の姿」に「變貌」したということを指している。しかし、ほんとうにそれは「本来の姿」なのだろうか。

いうまでもなくここで「米英的」というのは、上海を植民地にした西洋勢力をさしている。しかし、「東亞本来の姿」が、日本兵によって米英を上海の租界から追いだした後のことを指しているとすれば、少なくともそれは「上海」の「本来の姿」ではない。そもそも上海の租界を作つたのは米英である。「本来の姿」なら、黄浦江兩岸に沼地のまま、米英人も日本人もいない状態であらう。上海の土地は、西洋人の手から中国人の手に歸つて來たわけではない。中国人にとっては、「米英」に代わる新たな支配がそこで始まつたにすぎない。さらにいえば、「中国人」や「日本人」という概念すら、上海で現出された、いわゆる〈西洋の衝撃〉の結果生み出された近代国家の産物であつて、翻つて言えば、その〈西洋の衝撃〉が教えた「砲艦外交」や軍事的力による侵攻という方法をそのまま踏襲した日本の姿がそこにあつたにすぎないのである。

つまり、「米英的」でない上海を描写することは、そもそも難しい。この西川光の『十二月八日の上海』は、「揚子江の雨」から「武漢の大學」、「南京の城壁」から「蘇州の秋」、最後に「上海の橋」から「十二月八日の上海」を経て「變貌する租界」までという順に構成されているが、それが「米英的上海」の印象から始まるのは、「上海の本来の姿」であるがゆえに無理もないことなのである。

## 2. “鬼畜英米” 批判——魔都上海の汚名一掃

西川は上海を見て先ず、次のように記す。

——私はなにも、今さらのやうに上海の外観の説明をする気はないのだが、支那からの共同租借地たる上海が、支那で最も大きな都會であるといふことに、奇妙な錯覺を感じさせられてゐるのだ。外國風な石造の大建築物は、様々な建築様式を見せて、江岸を壓してゐるが、この土地の住民たる支那人は、堂々たる建築物の持主たる米英人の奴隸の如き地位にあるのが、私には不思議なのである。或は奴隸ではないと抗辯するかもしれないが、奴隸でなければ、米英の操つる手先に踊らせられてゐる傀儡としか思はれないのである。／私は大陸の各地を歩いて来て、最後に上海へ着き、租界を歩けば歩くほど、この感を一層深くするばかりであつた。事實、上海ほど露骨に米英色を見せてゐる場所もないからであらう（西川1943：199-200、下線強調筆者）。

さらにここから、ごく自然な問いかけが行なわれる。すなわち、「上海は東洋なのだらうか？ 西洋なのだらうか？」（西川1943：226）。

そして、「…現實に上海の米英租界を見て、私は一層さうした感情に捕はれてしまつたらしい」「…歐米化した支那人のタイプを、露骨に見せてゐて不愉快だつた」（西川1943:190）としながら、「…彼女達のパートナーの男達は、いづれも極端にアメリカ化した格好をしてゐる」（西川1943：191）、とさらに煽情的に、次のように記している。

上海名物の乞食と野鷄——夜の女ですよ…／煌々たるネオン・サインが、白晝のやうな輝きを見せてゐる街の一角に、野鷄が、關所の番人のやうに目白押しに立つてゐる。／こんな支那があるかと思へば、パーク・ホテルの硝子張の中にも支那がある。いや、あの高層のホテルの中にあるのは、支那ではなくて米英なのだらう（西川1943：192、下線強調筆者）。

つまり、上海を支配しているのは、「米英」であり、「上海」を短絡的に「西洋化された街」として批判する一方で、上海人は「乞食」と「野鷄」とに化したというのである。もっとも、それは客観的な状況認識とはいえない。高杉晋作らが「千歳丸」に乗って上海に来て、反面教師としてのこの「西洋化された街」が、如何に日本を改革する大きな動機となってきたのかを思い起こすことは、もはや彼にはできない。戦争に次々と勝利を収めた日本は、客観的に自分と世界および上海を見ることができなくなった、ともいえる。

たとえば、このような状況認識は、日本の一般人だけではなく上層部にも及び、上海に対する認識は「魔都」<sup>4</sup>というところに収斂していく。「今日の半日の印象では、はっきりしたことは分りませんが、上海はやはり魔都といった感じがしますよ」（西川1943：193）。「魔都」という言葉は、約20年も前に村松梢風が言いだしたことばであるが、それを検証なしに繰り返して使うことしかできないのである。

新聞『大陸新報』1943年7月11日（第1636号）の「租界還付と今後の上海」という何回にもわたる座談会の最終回のタイトルは、「上海再建の覚悟—魔都の汚名も一掃」というものであった。日本の占領政策によって、かつて清政府の腐敗や西洋の近代化によって形成された「魔都—上海」を壊すべしというのである。

西川のルポルタージュで頻繁に登場するのは「アメリカ」、「アメリカ批判」である。真珠湾攻撃後、日本国内外で口をそろえてそれは激しくなっていた。

松井翠声の『上海案内』の「血の横町」という章では、各国陣の喧嘩の特徴が書かれている。例えば、「喧嘩の常習犯は英国人と米国人で、この両国の水夫達は、好んで拳闘をやりたがる。…そして、面白いことには、日本の水夫達は、ビール壺投げの名人だが、野球の上手なアメリカの水夫達には、適用しない」、とある。また、「前世界大戦でも、今度の欧洲大戦でも、米英は直ぐに攻守同盟を結んで、独逸に抗戦してゐる」（松井1938：194-195）。松井がこれを書いた頃から事態は展開し、米英への開戦

---

4 上海を意味する「魔都」という言葉の初出は、日本小説家村松梢風が1924年に出版した長編小説『魔都』（小西書店）のタイトルである。



直前にも、日本は『帝国内策遂行要領』に基づきアメリカと交渉を継続していたが、効果はなかった。その結果、日本は米英等への開戦を決定していた。だが、上海でなにか起こると全世界の知るところとなる、ということに未だ変わりはなかった。その国際的影響力を考えると、日本と米英開戦後の状況や、かつての欧米の租界がどうなっているのかを、日本や世界に知らせることは、大きな意義があった。ここで西川は、自分が抱えているレポーターとしての任務を忘れることなく、英米に支配された上海の惨めさとアメリカ批判を続ける。

観客の大部分は、支那人の男女であるが、ほとんど若い男女ばかりで、外人の姿もチラホラ見えてゐる。米國の海兵が、派手な軍服姿で、支那の姑娘と腕を組んで入つて來るのが見られた（西川1943：224、下線強調筆者）。

その時の米兵は、対日本との関係では未だ戦勝国の軍隊ではなかったのだが、その4年後には、戦争に敗れた日本社会のあちこちにこれと全く同じ風景が現出された。

上海にいる日本人たちは、「アメリカ人」をとするとキャバレーで暴れている水兵で代表しがちであるが、大学や教会、研究所や病院におけるアメリカ人もいることを認識する必要があった。

谷川徹三他の『上海』には、次のように記されている。「上海の映畫は殆どアメリカ物である。私はある夜グランド・シアタアで「チャーリー・チャン・イン・リノ」といふ愚劣な映畫を一本立てでやつてゐるのを見た。これも上海に於けるアメリカ人をよく語るものであらう。中美日報とか大美晚报とかいふやうな抗日新聞はみなアメリカ籍になつてゐる。申報や新聞報のやうなそれほどでないものもアメリカ籍になつてゐる。事變後租界内に新しくできた大小の支那人工場もアメリカ人名義になつてゐるものが甚だ多い。これも上海に於けるアメリカ人の地位を語るものであらう。しかし私は一層大きな意味をもつてゐるものとして、アメリカの文化事業を見るものである」（谷川他1941：266-267）。

本来そうした米英の文化事業に着目しているべき西川のルポルタージュ

には、こうした谷川の視点は抜け落ちている。

また、「支那の近代化の問題」もこの種の議論にはつきものである。この『上海』所収の室伏高信「上海の印象」、「揚子江上に立つて」によれば、

支那の近代化が遅かつたか、早かつたか、それからして支那における謂ふところの「打倒帝國主義」の成功が、はかばかしかつたかどうかの問題は、私にとっては、二重の矛盾した答をもつてゐる。／これはあまりに遅かつたともいへるが、またあまりに早かつたときへも。——日本の模倣の天才たちに比べて、支那の猿猴たちが如何に遅かつたかと、私はいうた。けれどもまた支那の廣大さと、その人口と、それからまた何千年の昔から傳統して來た、あの世界無比の一大文化とについて見よう。…支那の近代化は遅かつたところではない、支那はあまりに廣大でもあり、複雑でもあり、重くもありまたあまりに深くもあつた——われわれは次のやうに答へよう、近代的機械の力をもつてしても、支那を近代化するためには、優に數世紀を要するであらうし、それからしてまた今日のアメリカ的意味からするならば、支那が最後に近代化するであらうか否かさへも、遂に一つの疑問であると(谷川他1941：307-309)。

こうした議論に見られるオリエンタリズムの問題も孕みながら、「支那」をどのようにとらえるのかという問題は、常に繰り返されている。「停滞」としての「支那」、それと対比される「進歩」としての「アメリカ」という叙述の構図は、シャンハイ・イメージのパタンを考える上でもきわめて興味深い議論へと發展していく。

支那の文化が傳統的な文化であつたことも一つの事實であり、またこの傳統的文化が支那の「進歩」を如何に妨げて來たかといふことも想像にあまりある。けれどもまたわれわれをして如何なる文化が進歩的であつたかについて、一考せしめよ。／凡ての真正な文化が「宇宙的全」への適應だといふことの事實について、われわれはわれわれの反省を促して見よう。それからしてまた、悠久なものへの憧憬と、認

識と、承認とがなくては、文化なるものがありえないといふことの事實について。／文化には進歩なるものが存在しない。あらゆる文化には進歩がない。進歩のあるところには文化はなく、文化のあるところには進歩はない。——ここにアメリカには文化がなくて進歩があり、支那には進歩がなく文化がある。／文化か、進歩か。人類は常に文化か進歩かの岐路に立つて來た。歴史の平衡が破壊されるのは、常にかくのごとき選擇においてである。／アメリカは進歩を追うて來た。その過去において文化の片鱗をもたなかつたアメリカ人は幸か不幸か。彼等自身を常に青年の若さにおいて來た。實に過去の存在をもたなかつたアメリカ人は、未來の存在だけを知ったのである。未來へ未來へ、發展へ發展へ、それから繁榮へ繁榮へと彼等は急いだ。この時である、彼等が彼等自身の進歩の哲學をもつことが出來たのは。——人類も、世界も、酷家も永久に進歩するものだといふことの、それからにしてアメリカには不景氣も行詰りも、没落もないものだといふことの。／アメリカから一轉して支那の社會を見よう。アメリカ人が子孫を崇拜するのに對して、支那が祖先を崇拜することを。アメリカ人が若さにおいて誇りをもつてゐるのに對して、支那人が彼等の老班の教育と指導とに甘んじて來たことを。アメリカ人が機械を崇拜し、機械によつて彼等の生活の悉くをつくりあげて來たのに對して、支那人が天に則り、天を崇拜し、また天を恐れて來たことについて。／…支那の社會こそは、進歩的社會であることの代りに、これは正に一つの、そしてまた最も安定的な、傳統的社會であつたのだ（谷川他1941：309-311、下線強調筆者）。

そして、対比軸としての「アメリカ」を批判する立場に転じると、皮肉なことに、「支那」は新たな可能性の要素を占めるようになる。

私は既に今日の支那において如何に宗法的要素の強いかを述べた。われわれをして、一轉して、支那の新しい方面について、一瞥せしめよ。／この近代の大建築の一群はどうだ。東洋一のマアケットは、カセイ・ホテルの壯觀は、カピトルのトオキイは、バスは、無軌道電車

は、アスハルトは、デパアトは、アパアトは、ダンス・ホオルは、スポオツ狂は、カクテル愛好者、——アメリカ的「イット」がここでは「異性快々」といはれてゐることは（谷川他1941：311）。

上海は「支那の新しい方面」の典型となっていくのである。

「支那の新しい方面」の典型としての上海には、当時の世界情勢を反映した新しい人々の流入もすでに世紀を跨いで起こっていた。

上海の外国人グループの中で、ユダヤ人と無国籍ロシア人とは比較的特殊なグループである。上海港が開かれてから、ユダヤ人は続々と上海に来ている。しかし、人数は多くなかった。

1933年、ヒトラーがドイツの総理大臣になってから、大規模にユダヤ人を排斥し殺害するようになると、次第に、多くのユダヤ人が上海に来るようになった（熊2003：3）。それは30年代の顕著な特徴である。「僕なんかは、このままの状態をつづけてゐたら、上海はユダヤ人の世界になりはしないかと思ふことがあるよ。もちろん、そんなことになったら大變だがね」（西川1943：216）と、上海での出来事をまるで日本でのことのように言っているイメージも登場するようになる。

このやうに、凡ゆる國々の言葉を、片言であらうが、何んであらうが、自由に驅使する力といふのは、彼等の祖先からの悲しき遺産なのであらう。彼等の祖先達は、國を失つて世界の果てまで、彷徨につぐに彷徨をつづけ、國々によつて、生きんがために、その國の言語を習得しなければならなかつた。そして、それが彼等の第二の天性になつてしまつたのだと考へるのは誤りであらうか。／「ドイツ、イイクニダネ」／友人は側の娘に、ゆつくりと日本語で訊いた。娘は笑顔を見せた。／「サウ、イイクニ」（西川1943：217-218）

当時、上海には約一万八千人のユダヤ人がいた。その中の約一万二千人が海軍警備地帯楊樹浦方面にいたので、日本海軍が保護していた。流入してきたユダヤ人は日本に感謝し、好意を示していたが、上海であるだけに事情はそう単純ではなかつた。

…併し成程彼等は日本に感謝してをりますけれども、約二千二、三百人あるユダヤ人難民の救済所の大部分の金はアメリカから來てをります。又上海に於ける最大の財的勢力サッソンはイギリス系猶太人であります。さういふ力が彼等の親日的傾向をいざといふ時には阻むのであります。又その猶太人に對する工作に致しましても、〇〇と〇〇とでは意見が同じではないやうです。例へば最近〇〇側の後援でとつた中華映畫、上海に於ける猶太人の生活を寫した記録映畫が、〇〇側で押へられ、今だに發表することが出來ないでをる、さういふ實情にあるのであります（谷川他1941：206）。

ここで言及されている「上海における猶太人の生活」の記録映画が、その後どうなったのかは定かではない。当時の写真などの記録は、上海社会科学院ユダヤ研究所などによる改革開放後のユダヤ人研究において、新たに編集発刊されている。アメリカとの関係についても、さまざまな説があり、日米開戦ギリギリまでユダヤ人ネットワークを使って開戦回避の工作が上海を舞台に行なわれていたとする説もある。いずれにせよ、上海におけるユダヤ人は日本にとっての世界との実に敏感な触媒であり、その動静にも大いに関心が寄せられていた。

### 3. 変貌する租界——転機としての十二月八日の上海

周知のように、共同租界合併以前、イギリス租界は1845年に、アメリカ租界は1848年に成立していた。それからほぼ一世紀の後、太平洋情勢が緊迫してくると、上海からの英米勢力が撤退する。上海市史上実に画期的な出来事であるといつてよい。1940年9月にイギリス軍が撤収、警備分団区域も義勇隊と日本に移管され、1941年暮れになると、11月27日に上海のアメリカ駐屯軍海兵の第一陣が引き揚げ、フィリピンの部隊に編入された。シンガポール防衛を強化したいイギリスは、上海の英国系船舶会社に緊急引き揚げを命令したので、12月はじめには英国船は続々と上海から香港・シンガポールに移動してしまった。日本が英米に宣戦布告したのは、それからまもない12月8日であった。以後1945年8月までの太平洋戦争が、上海

に大きな変動をもたらしたことはいうまでもない。

和田（1999）が、この時期の上海租界の変貌について、当時の新聞を用いながら実に興味深い分析を行っている。1941年12月8日が日本人のシャanghai・イメージにおいてどのような転機となったのか、和田のその分析によりながら再確認できる<sup>5</sup>。占領下の上海が果たして実際どのような状況であったのかについては、もっと多角的に再構成していく必要がある。人口に膾炙する事実そのものが、「孤島期」やそれ以前の上海についてのものに比べてあまりにも少なく、上海の日常がまるで消えてしまっているかのようだからである。

しかし、それを検証する前に、もう少し詳しく「1941年12月8日の上海」のイメージを積み上げておくべきであろう。それは実に「奇妙な瞬間」なのである。

日本国内では、人々はやや屈折して、「鬼畜米英」との戦いの開始によって日中戦争の暗い重苦しさから解放された瞬間であった。だが、それが上海においてどうであったのか。

日本の狂熱的な「自信」は西川の『十二月八日の上海』の「歴史が変わる」という言葉に良く表現されている。これは内務大臣木戸日記の記す日本国内の状況とも照応する。

1941年12月8日（月）晴

七時十五分出勤。今日は珍らしく好晴なり。赤坂見附の坂を上り三宅坂に向ふ、折柄、太陽の赫々と彼方のビルディングの上に昇るを拝す。思へば愈々今日を期し我国は米英の二大国を相手として大戦争に入るなり。今曉既に海軍の航空隊は大舉布哇を空襲せるなり。之を知る余は其の成否の程も気づかはれ、思はず太陽を拝し、瞑目祈願す。／七時半、首相と両総長に面会、布哇奇襲大成功の吉報を耳にし、神助の有難さをつくゞ感じたり。／十一時四十分より十二時迄、拝謁す。国運を賭しての戦争に入るに当りても、恐れながら、聖上の御態度は誠に自若として些の御動揺を拝せざりしは真に有難き極なりき。／宣

---

5 和田は、『朝日新聞』大阪版（以下、夕刊・日刊と記載）を分析素材として使用している（和田1999：36-41参照）。

戦の大詔は渙発せられたり（木戸1966：932-933）。

米英アジア侵略の象徴でもあった、上海での日本人の狂喜した姿を描く西川の『十二月八日の上海』の表現は、木戸よりさらに「元気」な筆致となっている。

…租界進駐！租界進駐！／今日こそは、あの敵性租界へ進駐するのだ。湧きたつやうな感激が、電光の如く心を慄はせる。／今日の如き偉大な朝が、日本の歴史にあつたらうか。／日本は決然と起つて、米・英と乾坤一擲の戦争を開始したのだ。かかる偉大な歴史の轉換を要求するよき日に、私はよくぞ上海に居たものだ。／上海——米・英が東亜侵略の根據地とし、重慶が抗日の最前衛據點とした上海共同租界へ、堂々の進駐をするといふのである。彼等の根據地を一舉に殲滅する絶好の日なのだ。あの敵性を、租界から完全に一掃してしまふのである（西川1943：245）。

当日の進駐時間や場所などの詳しい状況も、次のようにレポートされている。

…日本時間と上海時間とでは、一時間の差があるのだ。進駐開始の十一時は、上海時間では十時なのである。私の時計は、日本時間の十時を示してゐる。そろそろ報道部へ行かうと、北西川路の通りへ向つた。／街路は、日本人や支那人で一杯に溢れ、街頭に貼られた新聞社の速報の號外の前は、黒山のやうな人ばかりである。支那文の號外も散見し、支那人の異常に緊張した顔が、速報を凝視してゐる。號外と並んで、大日本陸海軍の支那文の布告が、飾窓や練瓦塀に貼られてゐた。布告には、——日本軍は今朝より東亜の秩序を脅かす米英勢力と西南太平洋に於て、戦争状態を展開した。租界も、今日限り日本軍の管理下に置かれる。日本の望むところは、要するに租界内の中國民衆の安居樂業であり、その生活は充分に保護するものである。中國人は安んじて、その業につけ。但し、日本軍の命に反し、また敵性行爲を





図1：南京路行進の陸軍部隊  
出所：上海市档案馆資料Y6-1-389.



図2：バンドの日の丸  
出所：高橋他編1995：219.



図3：小學校の生徒たちは陸戦隊員の  
保護をうけて楽しく學校を通っている  
出所：上海市档案馆資料Y6-1-389.



図4：邦人居留区虹口に於る戦勝凱歌  
出所：上海市档案馆資料Y6-1-389.

なし、武器などを隠蔽する者は、軍律の定むるところに照して、嚴重に處罰するものである。／といふ意味の嚴然たる内容のものだつた(西川1943：249-250、下線強調筆者)。

日本人にとっての「上海本来の姿」のイメージが一気に噴出することになるのであるが、それが「東亜本来の姿に還った」ことになるのかどうかは疑問であるにしても、少なくとも、そのような情熱的な「解放イメージ」が上海において現出されたという、そのエネルギーの根拠が何であったのかは実に興味深い。シャンハイはそれほどまでに、近代日本にとって欧米の抑圧の先鋭先端であったのだということを意味するからである。

図4の写真は、直接的には何の「大勝利」であるのか記事は不明である



が、12月8日の興奮そのものをよく伝えている。というのも、その実態は、何に勝ったのか、根拠も脆弱に「大勝利」と凱歌を挙げているに過ぎなかったのである。

今こそ、東亜の天地から、米英の勢力を完全に、根こそぎ驅逐して、東亜をして眞の東亜たらしめるのだ（西川1943：250-251）。…／支那人達が緊張した顔で、刻々と變化して行く租界内の事態に眼を瞪つて、茫然と立ち竦んでゐる。日頃の喧燥を忘れたかのやうに…（西川1943：257、下線強調筆者）。



図5：別れ惜しんでいる女達  
出所：和田他編1999：36.

…私は上海の碼頭でボロボロと涙を流して、アメリカの兵隊達と別れ惜しんでゐる女達——所謂チャイニーズ・ワイフ達の顔を、大寫しに撮つた寫眞を見たことがある。この白系ロシアの女達も、その仲間の一人だつたのだらう（西川1943：260）。

西川が言及している「写真」はおそらく図5であろう。こうした状況は、その後十年と経たないうちに、アメリカ占領軍が日本を去る時の横須賀などでも同じような状況が起こっていたことを想起することもできる。もっとも、中国人女性ではなく、ロシア人女性がそこに登場するところは、上海の上海たる所以なのでもあった。

上海市档案馆資料Y6-1-389の資料によると、8日の数日前の日本軍の「租界当局に対する示威の意味を含めた」進行中に、次のようなハプニングがあったようである。

租界内に今なほ残存してゐる抗日分子や租界当局に対する示威の意味を含めたわが軍の大進行が12月5日堂々とは行はれた。武装軍人の通行すら許されなかつた租界では正に空前のことである。このビッグ・パレードが佛租界を経て共同租界に入り南京路を行進中、百貨店新々公司前に突然凶漢が現れて爆弾を投付けたので行進中のわが勇士三名と警戒中の領事館巡查一名が負傷する騒ぎが起つた。一時進行を止め非常警備についたが犯人は現場で撃たれやがて絶命した。間もなく大進行は予定通り続けられ輝かしい記録を作つた。

考えてみれば、租界において中国の軍隊がその威力を発揮して行動したことはそれまでなく、各国間のバランスによって成立していた空間において特定の軍事力が力を誇示したことはなかつたわけであるから、正しいかどうかは別にして、確かに画期的なことであつたに違いない。その予行演習を経て、8日の行進で確実に上海を諸外国に対して占拠する状況が現実化したわけであり、そうした画期性において、日本人が自分たちは特別な存在であると考えerようになったとしても不思議はない。

…街を行く日本人の顔は、緊張に輝いて美しい。私の足は、又しても蘇州河畔の方へ向いてゐた。河向ふの江岸あたりは、まだひつそりと静まり返つてゐる。空を仰ぐと、何時の間に上げられたのか、競馬場附近と覺しきあたりの、薄曇りした空にアドバルーンが上げられてゐて、——日軍保確租界治安の文字が、上海の街を見下ろしてゐた。そのアドバルーンを見ながら、私はなんの聯絡もなく、南京にゐる草野心平氏の言葉を想ひ出してゐた。／（日本とはいいなア、日本はいいなア）／詩人らしい情熱をこめて、讃仰するやうな調子の、草野氏の言葉が、沁々とした實感となつて、私の胸に響いてくるのだ。／（日本とはいいなア、いいなア、日本は）／私は低く聲に出して、繰り返し、繰り返し呟きながら、いつか歩き出してゐた（西川1943：270）。

本当は日本ではない上海にあつても、そこは日本になってしまう心理的錯誤が、そうした高揚感の中から生じたとしてもまた不思議ではない。

国際都市上海の変貌を、統計的に根拠づける資料の一つがここに取り上げる表である。時期によってどういった変化が生じているのか、占領期に実際はどういうかたちでこれら「敵性外人」は拘束されていたのか、だれがどのような職掌において、そうした業務についていたのか等々、調査すべきことはたくさんあるが、ここでは統計的概略を把握しておくだけにする。

国別	公館員			特別措置				一般人	小計
	公館員	家族	小計	要注意者	予陸軍	予海軍	計		
アメリカ	21			7	18	2		1200	1248
イギリス	30	38		12	84	8		5146	5318
インド					120			1963	2113
フィリピン				1				259	260
カナダ								12	12
ベルギー	2				12			92	106
オランダ	4	4			19	2		150	179
ギリシャ					11	21			33
グアテマラ	2								2
メキシコ	3								3
ブラジル	3								3
その他								429	429
合計	65	42	107	20	264	33	317	9251	9706

表3：上海敵国非戦闘員の現況

出所：高網博文2005：36.

問題は、日本がもともと上海にあった複雑性を単純化してしまっているのではないのかという点にある。複雑多元的社会構成の問題を上海から汲み出してきた多くの研究が日本にもあったのにも関わらず、それを活かすことがなければ、近代日本のシャンハイ・イメージは一つの虚しい結末に到ることになるだろう。西川は、それを次のように描き、「東亜」が日本に「挙手の礼」をするような感覚でいる。

…私などには複雑怪奇としか思はれない租界の性格も、上海の住人から見れば、全く日常の茶飯事なのであらう（西川1943：280）。／租界に君臨してゐた米・英勢力を、まざまざと見せつけられ、身をもつて

闊つて來た人達にとって、今日のこの光景には、全く感慨無量なものがあるのであらう。上海の歴史は——東亜の歴史は、日本の大きな力によつて、劃期的な旋回をしようとしてゐるのだ（西川1943：285）。／…「新申報」の號外の速報が、街の壁や塀に、先刻よりはぐーんと敷を層して貼られてゐる。華文なので、私などには充分に意味は分らないが、凡そ推察だけはつく。／（日軍航空部隊は真珠灣を攻撃して、米國大太平洋艦隊を撃滅した）／（日軍陸軍部隊は馬來半島に敵前上陸をし、目下戦果を擴大中なり）／そんな文字が、私達の眼に鋭く刺さつてくるのである。それにしても、上海の、この平和な街の姿は何んといふのだらう。人波の中に、白いターバンを巻いたシーク族の、あのもぢやもぢやの漆黒の髯をたくはへた印度人巡警が、巨軀を見せて悠然と街角につつ立つて、交通整理をしてゐるのも平常の通りである。／日本軍の警備兵が行進して來ると、支那巡捕も、印度人巡警も道を譲り、このシーク族の巨人巡警などは、早くも舉手の禮をしたりなぞしてゐる（西川1943：287、下線強調筆者）。

アジアと日本との共感がもし存在しているのであるとすれば、シャンハイはまさにそれに相応しい地であつたはずなのだった。だが、そこに現出する「東亜本来の姿」はあまり日本人にじっくりくるものでもなさそうであつた。欧米列強の支配から「解放」されたシャンハイに、どのような多様性多元性が可能であるのか、さらに問題となってくる。

…私はその一枚を拾つて、泥を拂つた。／——廢除英美勢力、建設新東亜／美國といふのは、アメリカのことなのだ。どこから美などといふ文字を使ふのか分らないが、私達には、アメリカを指して美國なぞといふ文字を用ひるのは分らない氣がする（西川1943：288）。／霞飛路——このマロニエの街路樹の並んだ通りを、佛蘭西人達はアベニユ・ジョツフルと呼んでゐるのである。／佛蘭西流にアベニユ・ジョツフルと呼びのは、佛蘭西人達の望郷の所産であらう。だが、霞飛路といふ支那流の文字も、なにかこの街らしい性格を現はしてゐさうである（西川1943：290、下線強調筆者）。

「この街らしい性格を現はしている」とはどのような性格か、まさしくそれが問題であった。特に上海という街での力関係の変化にどのように日本人の視線が耐えるのかが問題であった。権力を握った為政者の側に立つという視座への変化によって生じる差異を、自らきちんと相対化できるのかどうかは、支配者の資質の重要な一部であるが、日本人はその力量に果たして達していたのかどうか、それが問題なのである。

いつ見ても、青黄色い支那人の顔は、際涯もなく廣い大陸のやうに、無表情だが、この一團の支那人の顔には、微かながら奇妙な表情が浮んでゐた。的確に、これが彼等の心であるとは言へないが、彼等の心の奥にある表情は、かうとでも言ひ現はせるのではないかと、私には思はれる（西川1943：295-296、下線強調筆者）／これは果して本當なのだらうか。この行列をしてゐる外人達は、一昨日まで豪然と構へて、われわれを顧使してゐた外人達と同じ人種なのだらうか。いや、信じられない。だが、これは、確かにわれわれの上に君臨してゐた外人達に相違ない。全く奇妙なことになったものだ。外人達は日本などには負けない。無論、租界には絶対に手を觸れさせはしないと言つてゐたが…。／私は彼等の表情から、彼等の心をかう解釋したのだが、この大陸的な國民の心は、私などの日本的な思考力とは違つてゐるのかも知れない。だが、人の世の中の興亡盛衰などには、太古の昔から馴らされてゐて、この外人の行列なども、ちよいとした見世物だとしか考へてゐないのかもしれないのだ（西川1943:296、下線強調筆者）。

こうした叙述だけで、当時の日本人の外地上海での権力の移行にとまなうシャンハイ・イメージの変化を代表させるわけにはいかない。だが、明らかに自らもってしまった権力の使い方に戸惑っている空気がここには反映されている。それが「大きな力」をもった日本への、根拠のない自己過信に繋がっていくのに、それほど長い時間は必要なかった。

私達が暢氣に話をしてゐる間にも、日本の逞しい力は、刻一刻と敵性租界を急速に變貌させつつあるのだ。／それは誰人も拒むことの出

來ない、日本の大きな力なのだ。大東亜建設の記念すべき無血進駐が、上海租界に大きな歴史の變貌をもたらしたのだ（西川1943：299-300、下線強調筆者）。

こうした無根拠な樂觀的思考が自己過信と相乗効果をもたらすと、かつて上海に抱いていたさまざまな劣性コンプレックスは次々に反転するようになる。そうした自らの複雑な心理状況を西川のルポはよく表現している。

米・英色を奇麗に拂拭した上海は、新しい世紀の息吹きを受けて、大東亜の上海として甦らうとしてゐるのだ。／私はカール・クローの「花園の洋鬼」の最後の一節を、ふと想ひ出した。／——だが、私達の家であつた上海はもうないといふことを、私達は知つてゐる。色んな國から來た澤山の良い友人達は、仕事が減茶苦茶になつたり、破産したりして、世界の隅隅へ散りぢりになつてしまつた。再び歸へつて來ない者も澤山あるだらう。／私達が避難者として、後に残して來た上海は、ただ私達の追憶においてのみ生きることであらう。／洋鬼の時代は終つたのである。／その通りである。東亜に於ける西洋の惡魔どもの時代は、過去のものとなつてしまつたのだ。歐米人の上海はもうなくなつた。／東亜には新しい世紀への、逞しい進軍が開始されてゐる。そして、上海にも、世紀の曙が、強く明るく射してゐるのだ（西川1943：300-301）。…／——洋鬼の時代は終つたのである。だが、彼等の播いた惡魔の種は、さう簡單には一掃されさうにもない。しかし、われわれは飽くまでも、惡魔の種を一掃するために闘はねばならぬのだ。／私の腦裡には、いろんな支那人の顔が浮んで來る。…／…だが、彼等の苦惱も、彼等の懷凝も、煩悶も、一切は歐米的なもののから脱却して、東洋への復歸の、一時的な心の戦ひなのである（西川1943：302、下線強調筆者）。

「洋鬼の時代」の終わりと「一切の歐米的なもののから脱却して、東洋への復歸」といった言説は、「復歸」そのものの姿を明示することなく「心の戦ひ」である、となると、それはいったいどのように「いろんな支那人」

へ説明することが可能なのであろうか。

ここで肝心なのは、この時点でもなお、日本は必ずしも自民族優先主義を強調しているわけではないということである。あくまで「洋鬼」を払拭し、「東亜の新世紀」を構築するというイメージにおいては、日本人と支那人とのあいだの曖昧な境界が、相変わらず融合できないままなのである。

## おわりに

『12月8日の上海』を境に、かつてアヘン戦争によって西洋列強が支配していた「魔都」が日本軍隊によってその魔性を喪失した瞬間を垣間みてきた。「租界」の喪失は果たしてどのような意味をもつのか、今後とも考えるべきところは多い。

日本に投影されることになったそうした「占領期」のシャンハイ・イメージも、第一次上海事変、第二次上海事変後と同じく、上海に対する当時の日本軍の無根拠な楽観的思考が自己過信との相乗効果によって形成されたが、この時期の重大な特徴は、「一二月八日の租界喪失」に象徴されるように、かつて上海を媒介にして抱かれていたさまざまな西洋への劣性コンプレックスが、そこで一気に反転していくということであった。

そうした、複雑な心理状況のなかでその後日本は敗れ、そのシャンハイ・イメージもそこから変化することをやめて、一時的に凍結していったのである。

## 参考文献

【中国語文献】（著者名ピンイン順）

馮璋：『大國通史・日本通史』（上海社会科学院出版、2008年）。

復旦大学歴史系編訳：『1931～1945日本帝国主義對外侵略資料選編』（上海人民出版社、1983年）。

甘慧杰：「論孤島期日本對上海公共租界行政權にめぐる爭奪」『档案と史学』2001年第6期（双月刊）。

甘慧杰：「“接收”から“重組”——租界陷落初期日本当局對上海的經濟政策行方」『史林』2009年第4期（双月刊）。

上海档案馆編：『日本在華中經濟略奪資料1937～1945』（上海書店出版社、2005年）  
魏斐德（ウェイクマン、フレデリック）〔Frederic Wakeman, Jr.〕・芮传明訳：『上海バッドランド—戦時のテロリズムと都市犯罪1937～1941—』（上海古籍出版社、2003年）。  
熊月之：『上海の外国人—（1842～1949）—』（上海古籍出版社、2003年）。  
その他：上海市档案馆資料Y6-1-389。

【邦語文献】（著者名アイウエオ順）

小竹文夫他：『支那研究第十八号 上海研究号』（東亜同文書院支那研究部、1928年）【山下武・高崎隆治監修：『上海叢書 第3巻』大空社、2002年、復刻版】。  
木戸幸一：『木戸幸一日記（下）』（東京大学出版会、1966年）。  
高綱博文：『戦時上海1937～1945』（研文出版、2005年）。  
高橋孝助・古厩忠夫編：『上海史—巨大都市の形成と人々の営み—』（東方書店、1995年）。  
谷川徹三他：『上海』（三省堂、1941年）【山下武・高崎隆治監修：『上海叢書 第9巻』大空社、2002年、復刻版】。  
西川光：『十二月八日の上海』（泰光堂、1943年）【山下武・高崎隆治監修：『上海叢書 第12巻』（大空社、2002年、復刻版）】。  
松井翠聲：『松井翠聲の上海案内』（横山隆、1938年）【山下武・高崎隆治監修：『上海叢書 第6巻』（大空社、2002年、復刻版）】。  
村松梢風：『魔都』（小西書店、1924年）。  
和田博文他：『言語都市・上海—1840～1945—』（藤原書店、1999年）。  
その他：『大陸新報』1943年7月11日（第1636号）。



## 論文要旨

徐 青

本文以杂志《文艺春秋》社的特派员西川光的《十二月八日の上海》为中心，以1941年12月8日日军偷袭珍珠港并于同日进驻上海租界的历史为背景试作分析。日军占领上海租界后提出了改造租界、扫除“魔都”、建立新上海的口号。但是，事实上日本侵略者并没有把上海共同租界真正从西洋人手中归还到中国民众的手里。对中国民众来说，“东洋鬼子”替代“西洋鬼子”的新的统治又在上海拉开了帷幕。在此后不断扩大的战争中日本侵略者们不仅给中国・上海的民众，同时也给东亚广大地域和民众造成的惨痛经历至今都无法从历史的记忆深处抹去。